【主たる交流先の相手国：ロシア】○長崎大学、福島県立医科大学

進捗状況の概要　【１ページ以内】

【2017年度】

1. 事業の開始にあたり，長崎大学にプログラム全体の事務局を設け，事業推進の基盤を構築した。
2. ロシア等への学生派遣では，修士課程学生等計９名がロシア連邦のI.I.メーチニコフ名称国立北西医科大学（以下、北西医科大学）でのワークショップ、フィールド実習に参加した。
3. ９月に北西医科大学の担当者との会議を日本で設け、日露大学間での教育制度の相違の認識から始め、単位互換から最終的にダブル・ディグリー・プログラムへの障壁と導入までのタイムラインを確認した。
4. 担当教員、事務局スタッフが補助金事業の採択校連絡会や各種会議に出席し、日露両国間に存在する課題を共有し、学生の心身・経済面の安全を担保し、研究を円滑に進められる環境づくりについて意見交換と協議を行った。
5. 参加大学の学長、担当理事等が参加したコンソーシアム設立総会を行い、カリキュラム及び学生交流に関する委員会を設置し、ダブル・ディグリー・プログラムに向けた準備を開始した。
6. 福島県立医科大学長と関係教員がロシアを訪問して北西医科大学と学術交流協定を締結した。
7. 講義・実習及び学生派遣・受入に必要な機器等を導入し、教育実施のハード面での準備を整えた。
8. ホームページ公開や本研究科のロシア語版パンフレットは、内外に向けて本事業の重要性と使命を周知すると共に、この分野を新たに志す学生を掘り起こす契機をもたらした。

【2018年度】

1. 北西医科大学と災害・被ばく医療における専門家育成を目的としたダブル・ディグリー・プログラムの実施に向けて、単位互換を開始した。学生受入を開始し，北西医科大学生６名が長崎大学において「放射線防護学」を受講した。
2. 長崎大学は昨年度に引き続き修士課程学生８名、福島県立医科大学は初めて修士課程学生２名の学生を北西医科大学へ派遣した。
3. さらなる単位互換科目として福島でのフィールド実習の開講に向けて準備を進めるなど、ダブル・ディグリー・プログラムの実施に向けて単位互換できる科目を増やすと同時に、事業終了後の継続性を考慮し、学生の負担を極力軽減するためにテレビ会議システムを利用した単位互換科目について検討を開始した。
4. 第２回となる年次コンソーシアム総会を福島県立医科大学が主体となって福島市で開催し、プログラムの進捗等について確認した。
5. 外部評価委員会を開催し、委員から交流学生の選考基準、アウトカム評価、協力校との連携の見える化、補助事業終了後の事業継続方策、社会へどういう人材を送り出すのかなど、有用な意見をいただき、事業改善を図ることができた。
6. 北西医科大学のプログラム担当教員を招聘し、福島県川内村において川内村実習検討ワークショップを開催すると共に、福島県立医科大学において放射線災害医療実習の検討会を行い、次年度以降の円滑な実習の遂行に向け、事前に実習の意義や特色、得られる知識、技能について確認した。
7. 国内の関連学会やロシア各地で開催された日本留学フェアにおいて本事業を積極的に紹介するとともに、国内外に向けた情報発信のためホームページを改修・充実させた。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

2017年度				2018年度			
派　遣		受　入		派　遣		受　入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
6人	9人	0人	0人	10人	14人	10人	6人

【主たる交流先の相手国：ロシア】○長崎大学、福島県立医科大学

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【１ページ以内】

【2017年度】

1. 日露学生フォーラムにおいて、災害・被ばく医療科学共同専攻学生の発表が日露首脳への提言書に言及された。
2. ホームページを公開し、学生派遣やコンソーシアム総会について広報を行い、本事業を周知した。
3. 各国の留学生フェア等の機会を通じてウクライナ・カザフスタンなどの旧ソ連邦の諸国でロシア語版パンフレットを配布し、本事業を周知した。
4. ロシア圏の協力研究機関等への訪問時に本事業の周知を図った結果，次年度の災害・被ばく医療科学共同専攻への入学に繋げることができた。
5. 福島県川内村の復興推進拠点に放射線測定器やモニタリングシステムを導入し、今後の実習の環境整備を行った。

【2018度】

1. 日露学生フォーラムにおいて災害・被ばく医療科学共同専攻学生が参加し、日露学生委員会の初代メンバーになった。
2. 災害・被ばく医療科学共同専攻のうち、留学生については秋入学とし、ロシアのアカデミックカレンダーとのギャップをなくした。
3. JICA開発大学院連携プログラムを利用して、災害・被ばく医療科学共同専攻にカザフスタン共和国の学生１名が入学した。
4. 北西医科大学は早い時期から日本への留学生募集を始め、厳密な選考を経て優秀な学生を派遣した。
5. 受入学生の生活面の安全を担保するため北西医科大学の引率教員を招聘した。引率教員は日本の講義を視察し、ロシアに持ち帰って日本からの留学生に向けた講義の参考とした。ロシアからの受入学生達は災害・被ばく医療科学共同専攻１年生とジャック・ロシャール教授（国際放射線防護委員会副委員長）による「放射線防護学」を共修した。
6. 長崎大学内の宿舎の整備、JASSO（独立行政法人日本学生支援機構）海外留学支援制度奨学金の申請など行うことで、受入学生が経済面・生活面において支障なく受講できた。
7. 「放射線防護学」を共修した北西医科大学の修士学生は、ディスカッション、レポートをもとに担当教員が成績評価を行い、成績証明書を授与した。
8. 本分野を志し、将来本事業に参加する者が出ることが期待されるため医学部生については聴講生として受け入れ、受講証明書を授与した。
9. 本事業の継続性を見据え、テレビ会議システムを用いて履修できる講義を増やすことができるようカリキュラム委員間で協議を開始した。
10. ベラルーシ共和国でのフィールド実習に備えて、ゴメリ州に共同実習センターを開所した。
11. 質の保証の観点から、2018年夏より「生物統計学」の英語テキストで長崎及び福島のプログラム担当教員による補講を行った結果、派遣学生全員が優秀な成績を収めることができた。
12. 長崎大学・福島県立医科大学からの学生派遣については、北西医科大学所有の宿泊施設を利用することで、安価で利便性の高い宿泊先を確保することができた。
13. 北西医科大学で開講する講義の諸経費については学生の送迎費用など必要経費のみとして昨年度より大幅に減額し、本事業の継続性を図った。
14. 12月に長崎大学で受け入れた北西医科大学の学生と、災害・被ばく医療科学共同専攻の学生が１月に再び共修したことで、学生間の交流が深まった。
15. 北西医科大学・長崎大学・福島県立医科大学の教員による合同セミナーが北西医科大学で開講され、現地学生が日本の災害・被ばく医療の現状を学ぶことにより、本事業を周知することができた。
16. 福島県内外の医療従事者も参加対象とした「福島災害医療セミナー」において本事業を周知した。本専攻への入学希望者の増加が見込まれることで、本事業の継続性を図った。
17. 来年度に単位互換を予定している「長崎大学川内村実習」「福島県立医科大学救急医学実習」の実施に向けて、北西医科大学から担当教員を招聘し、川内村や福島県立医科大学を視察した。これにより、次年度以降北西医科大学の学生が円滑で効率的な実習を受けられる体制を整えた。